

# 教訓としての古代

—— 商業的繁栄は亡国への道か？ ——

森 村 敏 己

はじめに

本報告では、18世紀フランスで盛んに議論された奢侈の問題を手がかりに、著述家たちがギリシア・ローマ史をどのように参照していたか、あるいは、古代共和国モデルは当時、どのような意義を担っていたかを考察したい。

18世紀フランスにおける古代史というテーマに関しては、Chantal Grellが広範な調査に基づく大部の研究書を著している。まずは主としてこの研究によりながら<sup>1</sup>、当時の教育における人文主義的伝統を確認することから始めたい。よく知られているように、アンシャン・レジーム期の中等教育を担ったのはコレージュと呼ばれる学校組織だった。運営していたのはもっぱら修道会だが、教育事業に熱心でもっとも多くコレージュを経営していたのはイエズス会である。コレージュでの教育では、古代作家のテキストを用いた古典語文法および人文学が大きな位置を占めており、ラテン語についていえば、頻繁に利用された作家はキケロ、オウィディウス、ウェルギリウス、ホラティウスであったとされる。歴史は独立した科目として教えられていたわけではないが、道徳教育の一環をなすものとして重視されており、そこではティトゥス・リウィウスやプルタルコスが主要なテキストとされていた。修道会が経営するコレージュでは当然、よきキリスト教徒を育成することを教育の目的としている。そのため、古代異教徒の作品を用いながらも、そこから導かれる教訓は死や貧困を心静かに受け入れること、現世における不平等を受容し、野心を抱かぬこと、家父長そして何より君主の権威を尊重し、これに従うことといった内容である。こうした教訓がキリスト教および君主制を強化する方向に向けられていたことはいうまでもない<sup>2</sup>。しかし、18世紀に入り、いわゆる啓蒙思想運動が進むにつれてフィロゾーフたちは、ラテン語と古代作家の偏重を理由にコレージュを

批判するようになる。彼らによればラテン語はもはや死語であり、現実生活の中で使われることはほとんどない。つまりコレージュは長い時間をかけて卒業すればすぐに忘れてしまうような無駄な知識を詰め込んでいるに過ぎないというのである。そして彼らは伝統的なカリキュラムに対して、フランス語とフランス史、とくに同時代に近い時期の歴史教育の必要性、地理や科学教育の重要性を主張するようになる<sup>3</sup>。こうした要求の背景に17世紀以来の科学革命と呼ばれる動きがあったことは間違いない。『百科全書』が学問の最新状況を集大成することを目的として編纂されたことから分かるように、当時、自然科学を中心に諸学問は大きく発展を遂げていた。フィロゾーフにとってニュートンは経験論に基づく新しい学問の騎手であり、ニュートンによって乗り越えられたデカルトの学説さえもなかなか受け入れようとしなかったコレージュの教育は旧態依然たるものに映っていた。フィロゾーフたちはこうした新しい科学の成果を教育に取り入れることを求めていたのであり、そこには当然、キリスト教的な世界観、道徳観への批判が意図されていたといつてよい。

もちろん、コレージュの側も状況の変化から目をそむけていたわけではない。現に、ラテン語およびギリシア・ローマ史に当てられる時間は少しずつ低下したとされる。また、オラトリオ会が経営するコレージュでは比較的早くから教育の場にフランス語を導入するといった変化が見られたという<sup>4</sup>。さらに、世紀後半になるとギリシア・ローマ史は古代作家を直接読むのではなく、縮約版あるいはフランス語訳で教えられることが増えていった。しかし、最大数のコレージュを経営していたイエズス会はラテン語での教育と伝統的なカリキュラムに固執していたし、なにより修道会は新しい自然科学が伝統的な人文学およびキリスト教のオーソドクシーにとって脅威となるのではないかという危惧を捨てなかった。このためコレージュでの教育がラディカルに変化することは望めない状況であった。

一方、コレージュを批判するフィロゾーフ自身もほとんどがコレージュでの教育を受けており、自らの作品でウェルギリウスやホラティウスを引用したり、ギリシア・ローマ史を参照したりすることをやめたわけではない。また、独学の人ルソーも幼い頃にプルタルコスに熱中して以来、古典作品を読みふけていた。彼らにとっても少年時代に教え込まれた伝統的知識はいわば身に染み付

いたものであり、簡単にそれを捨て去ったわけではないのである。

## 1 奢侈批判の伝統

次に奢侈論争において、奢侈を批判する議論が古代史をどのように用いていたかを確認しておきたい。反奢侈論はキリスト教道徳、身分制擁護論、古いタイプの重商主義政策など多様な要素を含んでいるが、ここではモデルとしての古代共和政という観点に限ることとする<sup>5</sup>。ギリシア・ローマ史に親しんでいた当時の知識人にとってアテネとスパルタ、カルタゴとローマという対照的な性格をもつ共和国の対比は馴染み深いものだった。その場合、いうまでもなくアテネとカルタゴは繁栄した商業国として、共和政ローマとスパルタは商業とは無縁な軍事大国として理解されている。そしてポエニ戦争およびペロポネソス戦争におけるローマとスパルタの勝利は、貧しいけれど有徳な軍事国家は、豊かだが墮落した商業国家に勝ることを証明する事例として捉えられていた。ここで対比されているのは商業と軍事、あるいは、商業精神と軍事精神、利害関心と名誉心である。最後の名誉心は祖国愛、徳、武勇といった言葉と交換可能な意味で用いられることが多い。商業国家では富の蓄積とともに人々は快楽に溺れ、奢侈に耽るようになる、その結果、富への欲望ばかりが肥大化し、利害関心が中心的な行動動機となり、公共精神が忘れられるようになるというのである。そして市民は自らの命を捨てて国を守る気概を忘れてしまい、戦争はもっぱら金で雇った傭兵に委ねるようになる。こうした国が、質素な生活習慣を守り、市民が自己利益よりも公共利益を優先し、自ら兵士となって勇敢に戦う国家を相手に勝てるわけではない、現にカルタゴはハンニバルの活躍にもかかわらず、その勝利を活かすすべを知らず、富によって墮落したアテネは所詮、スパルタの敵ではなかった。つまり、奢侈とは商業による経済的繁栄、市民の富裕化の必然的結果であり、また、人々を軟弱かつ利己的にすることで国家の衰退を招く原因とされたのである。こうした議論では商業精神とはもっぱら経済的利益ばかりを追い求めること、つまり利害関心を主要な行動動機とすることを意味している。一方、軍事精神とは命を賭して戦場での栄光を第一の目的とすることである。名誉心とはその場合、戦場での名誉を求める情念の意味で使われていたし、公德心も軍事的な勇気がその中心的な内容であった。祖国愛

についても同様である。戦場で祖国のために命を捨てるのが祖国愛の最も高い表現だとされた。そして、利害関心と名誉心、商業精神と軍事精神とは両立することが不可能なものとして捉えられていた。

こうした議論を支えていたのが古代史だったのである。奢侈に染まったペルシアに対するギリシアの勝利、アジアからの富の流入に伴い共和政から帝政へと移行し腐敗したローマ、リュクルゴスの法を捨てて富の流通を許したために墮落し、敗北したスパルタなど、すべて同じ文脈で語られるが、もっとも多く用いられる例はやはりペロポネソス戦争とポエニ戦争であった。

こうした反奢侈論は、先に述べたようにそれ以外の多様な要素の後押しを受けており、極めて強力なものだった。しかし、フランスでもマンドヴィルの『蜂の寓話』（初版1705年、スキャンダルとなるのは1723年、現在の形となるのは1724年）の影響を受けて奢侈を擁護する議論が登場することになる。奢侈擁護論は基本的には奢侈の原因とされた経済的繁栄を賞賛する文脈で現れる。ジャン・フランソワ・ムロンの『商業に関する政治的試論』（初版1734年、1736年第2版）でも一番強調されるのは、奢侈という名で呼ばれている消費の拡大は雇用を増やし、生産を刺激し、経済を発展させるという点だった。こうした議論はムロン以降も基本的には引き継がれていく。しかし、経済面での議論だけで奢侈に着せられた汚名をそそぐことは出来ない。なにより、従来の奢侈批判自体、ムロンとは議論の方向が逆であったとはいえ、経済的繁栄と奢侈との関連は認めていたからである。問題は、経済的繁栄が公共精神と軍事精神の衰退を招くかどうかだったのである。

ムロンに影響を与えたマンドヴィル本人は、この点について古代史ではなく現代を参照すべきだとしている。彼によれば、現在もっとも商業的に繁栄し、豊かな生活を享受しているのはイングランドだが、イングランドは同時に軍事的にも勝利を重ねている、この事実は古代史のいかなる事例よりも雄弁だというのである<sup>9</sup>。しかし、ムロンは伝統的な議論を無視するという方向は取らなかった。彼はむしろ古代史のエピソードを読み替えようとする。ムロンによると、商業精神は獲得した富を維持しようとする精神を育む、それは必然的に軍事力の強化に向かうのであり、一方、戦場での勝利しか念頭にない軍事精神だけでは獲得した領土を維持し、経営する能力に欠ける。ではカルタゴはなぜ敗

北したのか。それは一般に言われているように商業精神のためではなく、逆に商業精神の未成熟のせいだった。つまり当時のカルタゴは商業国家としてまだまだ発展途上にあり、維持の精神が未完成だったために、軍事精神が絶頂の状態にあったローマに敗北したのである。もしもカルタゴが当時、商業精神を十分に発達させ、これに維持の精神を組み合わせていれば、彼らにとって「第一次ポエニ戦争当時のローマなど、山賊の群れ程度のものでしかなかったろう。」ムロンにとって「貧しく有徳な国」など幻想にすぎない。「国民がただ軍事的でしかないとき、これを服従させるのはたやすい」<sup>10</sup>のである。

しかし、のちの奢侈擁護論に大きな影響を与えたことは確かだとはいえ、1730年代という時期においてはムロンの議論は主流となるものではなかった。それに商業精神がもっと発達していたらカルタゴは負けなかったという主張は歴史にifを持ち込むものであり、説得力をもったとも思えない。18世紀半ばになると、古代史の読み替えはムロンとは異なる方向で行われることになるが、その前に、50年代以降の議論にとって重要な枠組みを提供したモンテスキューの見解を見ておくことにしたい。

## 2 モンテスキュー

モンテスキューは『ローマ盛衰原因論』を著したことからも分かるように、古代史に精通し、人文的素養を十分に積んでいるだけでなく、ボルドー・アカデミーの会員として自ら自然科学の実験を行うなど新しい学問の動向にも敏感な、当時を代表する知識人である。彼もまた、軍事精神と商業精神、公共心と利害関心を対立するものとして捉えるという点では伝統的な議論を踏襲している面がある。しかし、モンテスキューは独自の政体区分によって経済的繁栄による国家の衰亡というテーマに新たな要素を持ち込んだ。周知のように、モンテスキューは君主制、貴族政、民主政という古典的な政体区分に代えて、共和政、君主政、専制という三政体を区別する。最大の特徴は君主政と専制とを区別することで、君主制における自由の保証として権力の分配を主張し、絶対王政を批判する理論的枠組みを提供したことだが、ここでは商業と奢侈の議論にテーマを絞りたい。商業的繁栄による富の蓄積が私的利害の強化と奢侈の普及を招き、徳と祖国愛を損なうという議論それ自体をモンテスキューは受け

入れているといつてよい。しかし、それが国家の衰退の原因となるのは共和国に限られるというのが、この問題における彼の重要な論点である。というのも、市民の公共精神の喪失が国家にとって致命的な打撃となるのは市民自らが主権者である共和国の特質なのである。共和政の原理は徳であるというのはこうした意味である。しかし、君主国では事情が異なる。君主政の原理は徳ではなく、名誉心、モンテスキューの理解では階層化された社会を前提に特別待遇を求める偏見が君主政を支えているのである<sup>8</sup>。名誉心も利己的な情念である点では富への欲望つまり利害関心と変わりはない。しかし、名誉心はときに利害を、場合によっては命を捨てることを要求する。軍事に引きつけて言えば、戦場での栄光のためであれば、富も快樂も捨てることを可能にするのが名誉心なのである。私的利益を公益のために犠牲にする徳と、利己的情念である名誉心とはあくまで別のものだが、君主政においては名誉心が国家の維持・拡大を可能にするとされる。その意味で名誉心は君主政の原理なのである。この場合、原理とは、それぞれの政体にはそれにふさわしい情念が備わっていることを表しているのではなく、その情念が支配的である場合に国家がうまく機能するという意味である。このため、君主政国家に徳が存在しないわけではないが、君主政において商業的繁栄による奢侈の普及と徳の低下は致命的な結果を及ぼすことがないのである。名誉心が保たれていれば、徳が衰えても君主国は衰退しない。それどころか、階層化され、富の分配が不平等な君主国では、富裕層による過剰な消費は富の再分配機能を果たす。その意味で君主政には奢侈が必要なのである。モンテスキューによれば「共和国は奢侈によって滅びる」が、「君主政国家は貧困によって滅亡する」<sup>9</sup>のであり、商業的繁栄は君主国を衰退させるものではない。言い換えれば、モンテスキューによって君主政とは経済的繁栄と国家の維持とを両立させる政体として構想されているのである。

このためモンテスキューにとって古代共和政の歴史が示す教訓は、そのままフランスに適用できるものではなかった。アテネとカルタゴが商業的繁栄ゆえに敗北したとしても、それは両国が共和国だったからであり、君主国フランスにとっての教訓とはならない。この意味でモンテスキューは古代共和政を教訓あるいはモデルとして用いる議論から距離をおき、別の文脈で近代国家を議論する方向に大きな一歩を踏み出したといえることができるだろう。ただし、モン

テスキューは繁栄を支えるための商業活動の担い手を第三身分に限定していた。アンシャン・レジームのフランスには貴族が商業を営むことを禁じた特権喪失法という法律が存在していた。17世紀以来、王権はこの法の適用範囲を狭め、18世紀には小売業以外なら処罰されることはなくなっていたのだが、モンテスキューは貴族に商業活動への全面的な参入を認めることに反対している。君主制において貴族に商業を許すことは商業の精神にも君主制の精神にも反しており、現に貴族に商業活動を認めるイングランドの慣行はこの国の君主政体を弱めることに貢献したという<sup>10</sup>。モンテスキューの死後、この問題は論壇における経済問題への関心の高まりや軍務に就けない貧乏貴族の社会問題化などを背景にその重要性を増していく。その結果、1756年からあしかけ4年に渡り「商人貴族論争」と呼ばれる激しい議論が生じるようになった。そこではモンテスキューの議論の借用、歪曲といった問題だけでなく、古代史の参照の仕方についても興味深い論点を指摘することが出来る。次節ではこの論争を検討することにした。

### 3 商人貴族論

この論争のきっかけとなったのはアベ・コワイエが発表した『商人貴族論』と題された作品である。ここで彼は特権喪失法を廃止して、貴族に商業活動への全面的な参加を促すことを提案している。論争の詳細については別の機会に論じたことがあるため<sup>11</sup>、ここでは古代史の参照に関わる問題に議論を限ることとする。

コワイエの提案は大きな反響を生み、その後定期行物による書評を除いても17もの作品が論争に参加することになった。大まかに言って、コワイエと彼を支持する論者たちは、フランスの商業はイングランドに比べ遅れをとっているという危機感から、現在商業活動を行っていない貴族という人材とその資本を商業に投じることで、フランス商業の拡大、および商業が先導する形での経済活動全般の活性化を求めている。これに対して反対派は貴族に商業活動を許せば、彼らは利害関心に染まり、金儲けに走り、軍事精神と名誉心を失って国を守る気概をなくしてしまい、ひいてはフランスの滅亡に繋がるとしている。

こうした対立図式の中、コワイエたちは、アテネとスパルタ、カルタゴとローマの例を持ち出す伝統的議論に反論するために、二重の戦略を採っているように思われる。

ひとつは、古代史の教訓を読み替える、あるいは自説に有利な事例を古代史から拾い上げることである。コワイエによれば地中海を長年に渡って支配してきたカルタゴは間違いなく強国であり、ポエニ戦争においてもローマをあと一息で滅亡させるところまで追いつめた。最終的には敗れたとはいえ、それはカルタゴが商業精神ゆえに墮落していたからではなく、相手が強すぎたからである。世界を征服するような力を持った絶頂期のローマと長年互角に渡り合ったことをむしろ評価すべきだ、というのである。さらに、イタリア半島で勝利を続けるハンニバルに援軍を送らず、決定的な勝機を逃したのもカルタゴ本国内の党派争いが原因であって、商業精神による墮落とは無関係である<sup>12</sup>。それに、カルタゴ以外にもシラクサ、アテネ、マルセイユ、アレクサンドリアなど強大な軍隊に包囲されながら頑強に抵抗を続けた古代の商業都市の例には事欠かない<sup>13</sup>。コワイエのこうした主張の背景には、経済的繁栄による富の蓄積、それに伴い成長する中間層こそが自由の砦であるという認識がある。専制君主という国内の敵であれ、征服者という外からの敵であれ、最後までこれに頑強に抵抗を続けるのは失うものを持たない貧者ではなく、財産を所有する階層なのだとされる<sup>14</sup>。デイヴィッド・ヒュームを引きながらこのように主張するコワイエは富の蓄積を軍事力の衰退と自由の喪失に結びつける伝統的解釈への反論を意図している。また、商人貴族論争においてコワイエを支持する有力な議論を展開したフォルボネは、商業的繁栄が国家を弱体化させるなどという議論はコレージュの教師の下らない説教に過ぎないとして、コレージュでの古代史の参照の仕方を批判している。そして商業都市チュロスがいかにネブカドネザルの包囲に長い間耐え抜いたかをむしろ教えるべきだとしたうえで、ハンニバルがカンネーの勝利の後ローマをすぐに包囲しなかった原因をカルタゴの富に求めるのは馬鹿げていると主張し、伝統的なローマ対カルタゴの対比に異論を唱えている<sup>15</sup>。

第二の、そしてより重要な反論は古代共和国の歴史はもやは教訓とはならない、という議論である。端的に言えば、「時代は変わった」のである。古代共

和国の市民の徳は確かに称賛に値する。しかし、コワイエによれば現在は快樂が支配する時代、豊かな生活を享受することが目標となった時代であって、もはや後戻りは出来ない。スパルタの質素な生活、ローマの習俗の厳格さはよく分かっている。

「しかし、われわれはすべての享樂を知ってしまった国に生きているのだ。立法者と国王の手腕とは人間をあるがままに捉えることである。」<sup>16</sup>

言い換えれば、快樂の享受を原理とする近代国家において自己犠牲に基づく祖国への奉仕を要求しても無駄なのであり、利益と快樂という報酬があつて初めて国家という巨大な装置は機能するのである。ここには公德心を国家の基盤とした古代共和国とは対照的な国家像が表現されている。他の論者の表現によれば、人はオリブの冠だけでは生きていけないのである。スパルタの時代はとうに終わったのであり、現在は利害関心が支配的な情念となった時代なのだ<sup>17</sup>。次のフォルボネの言葉はこうした認識を端的に示していると言えるだろう。

「ヨーロッパに関する政治的概念をもっぱらギリシア・ラテンの著者からしか汲み出そうとしない者はどんなに立派な意図を持ってしようと、自国の利害を理解することは決してないだろうし、我が国の統治について何も分からないだろう。われわれの統治の諸原理はギリシア・ラテンの人々にはまったく知られていなかったのだから。」<sup>18</sup>

このような認識は、徳や名誉といった概念の再解釈を伴うものであった。コワイエやフォルボネはもっぱら軍事的な意味を担われてきたこれらの言葉を、社会的有益性という観点から解釈し直そうとしている。それによれば、軍事以外の方法、端的には経済活動による貢献も祖国への奉仕であり、その限りにおいて有徳な行いであり、名誉ある行動なのだとされる。つまり、彼らは私欲の解放を認めたとうえで、それを前提とした道徳に立脚した国家像を提示しようとしているのである。こうした議論は、戦争のあり方も変化したという認識にも支えられていた。コワイエらによれば、戦士の勇気が闘いの帰趨を制した時代はとうに終わっている。軍隊の規律も兵士の武勇も確かに必要だろうが、もっとも重要なのは経済力だと彼らは主張する。現代の戦争に勝利するには、とりわけ重要性を増している海戦を勝ち抜くには膨大な費用がかかるのであり、それをまかなうことが出来るのは活発な商業活動しかない。「歴史が浅

い頃、諸国民を屈服させたのは鉄だった。しかし、今では黄金だ。』<sup>11)</sup>

この論争が始まってまもなく七年戦争が勃発する。ヨーロッパ内部を見ればフランスは主にプロイセンと戦っていたにせよ、本当の主戦場はインドおよび北米大陸であった。フランスはこれらの地で、商業大国であり強力な海軍を要するイングランドと戦い、最終的には手痛い敗北を喫することになる。コワイエたちはもちろん始まったばかりの戦争の結末を知っていたわけではないが、彼らにとって豊かな商業国家は軍事的には脅威ではないとする教訓が説得力を失っていたことは疑いない。

古代史の利用とモデルとしての古代共和政の否定、このふたつの戦略は相容れない性格をもつように見える。しかし、論者たちが矛盾を感じていたようには思えない。彼らにとっていちばん重要なのは、使い古された対比を持ち出して現状を認識しようとする論敵たちに反駁することであり、論理の整合性ではなかったのである。

#### 4 軍人貴族論

一方、コワイエに反対し、貴族は軍人であるべきとする軍人貴族論者は相変わらず、戦争に勝つために重要なのは富ではなく勇気だ、最大のライバルとされるイングランドなど、商業国家に過ぎず、遠からず墮落するので恐れるに足りない、スパルタに学べ、ローマを見よ、歴史は真理への道だと主張し続ける<sup>12)</sup>。しかし彼らの議論にも時代の影響が感じられないわけではない。コワイエに最初に反論したシュヴァリエ・ダルクは商業は共和国にこそふさわしく、君主政国家には適していないうえに、たとえ共和国でも商業的繁栄は国家の衰退を招くと頑なに主張しているが、コワイエを批判する人々がおしなべて商業に敵対的なわけではなかった。彼らも経済力の重要性、また現代は快楽が支配的な情念の対象となった時代であるという認識はある程度、共有しているといっていよい。しかし、それでも貴族は商業を行うべきではないというのが彼らの結論だった。その意味で彼らの主張はモンテスキューの君主制構想に近い性格をもっていたと言えるかもしれない。事実、君主国に商業は適さないという、モンテスキューとは対立する議論を展開するダルクも含めて商人貴族反対派はモンテスキューの権威を自説の支えにしようとする。貴族は商業活動をしては

ならない、商業精神に染まってはならない、利益を追い求め商業に従事することは第三身分に任せておけばよい、という主張を繰り返す彼らの多くは貴族であった。君主制を守るには身分制の維持が不可欠だという議論もモンテスキューを引き合いに主張されている。つまり、彼らは経済活動は第三身分、軍事は貴族という身分による役割分担の明確化を求めているのである。もちろん、貴族がみずから騎士として槍を抱えて馬に乗り、一騎打ちをする時代は終わっている。重要なのは常備軍の規模や装備である。そして軍の大部分を成す兵士は第三身分で構成されている。しかし、売官制により多くの平民出身者が入り込んでいたとはいえ、軍を指揮する士官は基本的には貴族であり、貴族の武勇が勝敗を決するという信念を彼らは捨てようとはしなかった。貴族である士官が率先して示す勇気と祖国愛、国家と国王のために進んで命を投げ出す気概が軍全体の士気を高め、戦闘を勝利に導くのである。そして、このように祖国愛に燃え、富も快楽も命も省みず、戦場で勇敢に戦う戦士の手本とされたのが、古代共和国の兵士、すなわち古代共和国市民だった。こうした議論の立て方にはある種の違和感を覚えざるを得ない。身分制とそれに伴う貴族特権の維持を強く求める貴族たちが、市民の平等を基盤とした共和国市民の公徳心を自らの理想としているのである。Chantal Grellは古代共和政の理想視は、君主制批判には向かわなかったし、現実にフランスを共和政に移行させようとする動きは生まなかったとしており、この指摘は説得的なものである。しかしその一方で彼女は、古代共和政の理想視は貴族特権への批判という側面をもっており、ゆえに自己の特権を正当化しようとする貴族イデオロギーの論者は、古代共和政を参照しない傾向にあるとしている。この主張は疑問である。少なくとも商人貴族論争において、コワイエを批判する陣営はフランス貴族と古代共和国市民を重ね合わせた議論を展開している。ダルクを除けば、商業精神が多くの国民を捉え、経済力の拡大が国家の重要な政策課題になった時代が到来したという認識は彼らもコワイエたちと共有していた。彼らが引き合いに出すモンテスキューも同様である。しかし、反コワイエ派はモンテスキューと同じく、貴族を含めたすべてのフランス国民が商業精神に支配され、利益の獲得を第一の目標とするようになることは拒否している<sup>13)</sup>。いってみれば彼らは商業精神が支配的となった社会の中に、それとは別の原理に従う一団を確保しようとしているの

である。その一団が貴族であることは言うまでもない。つまり、商業精神という原理に汚染されることなく、戦場での名誉のためにすべてを犠牲にする覚悟を持ち続け、国家を敵から守ること、それこそが貴族に課せられた使命だったのである<sup>22</sup>。とりわけ軍人貴族論者が期待をかけたのは地方に住む貧しい貴族たちだった。ヴェルサイユに集う宮廷貴族あるいは富の力によって身分を手に入れた新興貴族とは異なり、彼ら田舎貴族は経済発展の恩恵から取り残され、奢侈に耽ることもなく、質素な暮らしを続けている。商業精神と奢侈の悪影響を免れている彼らこそフランスを守る最後の砦だとされた<sup>23</sup>。そしてこうしたフランスの貧しい地方貴族の姿は古代共和国の兵士と重ね合わされている。

「ローマ人は誰もが兵士だった。彼らは軍事的な奉仕と同朋の支持によって階級を上げ、指揮権という榮譽を手に入れたのだ。彼らの教育はまったく軍事的なものであり、彼らの父祖は武器を携え、祖国を愛し、そのために戦い、死ぬことだけを望んでいた。それは、われわれ貴族の精神とほとんど同じものである。」<sup>24</sup>

古代共和国のモラルはもはや国民のモラルとはなりえない、現在のフランス人はスパルタ人、ローマ人にはなれない、しかし、貴族という国家の中核を担う集団にとって古代共和国市民はモデルとして機能し続ける。これが軍人貴族論の主張だったのである。

## むすび

貴族は商業活動を行え、と主張したコワイエたちは明らかに古代共和政と近代国家の性格の違いを意識していた。そして、古代史への参照をやめたわけではないにせよ古代共和政はもはやモデルではないという認識を抱いていた。もちろん、彼らの議論がすぐに主流となったわけではない。ルソーやマブリといった影響力のある思想家は相変わらず古代史を持ち出しては現代のフランス人の墮落ぶりを告発していた。また、Grellによれば1770年代以降スパルタの人氣が陰り、商業大国であったアテネへの賞賛が高まったとされるが<sup>25</sup>、こうした変化を過大に評価することもできない。1780年代になっても相変わらずスパルタとアテネ、あるいはローマとカルタゴを参照し、貧しい軍事国家のモラルを称える言説は消えていないのである。たとえば、1782年にブザンソン・

アカデミーが提出した懸賞論文のテーマは「奢侈は習俗を墮落させ、国家を滅ぼす」だった。このテーマ設定自体、議論の方向を予め定めているが、現存している応募作品8点のうち、古代共和政に触れていないものはひとつもない。もちろん、議論の中心が当時のフランス人の墮落ぶりの描写におかれ、古代史の参照が小さな割合しか占めないものもあるが、半数以上は手垢の付いた古代史のエピソードを議論の柱としている<sup>26</sup>。

18世紀半ば、もはや古代共和政はモデルではない、という声は確かに上がり、時代は変化したのだという認識は少しずつ浸透していった。しかし、フランスの知識人たちが古代の教訓から完全に脱却し、まったく別の原理に立った新しいモラル、新しい国家像を構想するのは容易なことではなかったのである。

## 注

- 1 Grell, Chantal, *Le dix-huitième siècle et l'antiquité en France 1680-1789*, Voltaire Foundation, 1995, 2vols. (*Studies on Voltaire and the 18<sup>th</sup> Century*, tome 330-331) およびアンシャン・レジーム期の教育に関しては、Chartier, R., Compère, M. M. & Julia, D., *L'éducation en France du XVII<sup>e</sup> au XVIII<sup>e</sup> siècle*, SEDES, 1976. Lebrun, F., Venard, M. & Quéniard, J., *Histoire générale de l'enseignement et de l'éducation en France*, tome II, *De Gutenberg aux Lumières*, Nouvelle Librairie de France, 1981.
- 2 Grell, op. cit., tome I, pp. 43-44. Lebrun et als., op. cit., pp. 318-319.
- 3 Lebrun et als., op. cit., pp. 534-537.
- 4 ただし、以下の研究によれば、こうしたオラトリオ会のコレージュのいわゆる「先進性」については留保が必要であるとされる。Chervel, André, "L'enseignement des langues dans les collèges de l'Oratoire", *Le collège de Riom et l'enseignement oratorien en France au XVIII<sup>e</sup> siècle*, textes réunis et présentés par Jean Ehrard, SNRS, 1993, pp. 229-237.
- 5 フランスにおける奢侈論争の概要を簡潔にまとめたものとしては、Ross, E., "Mandeville, Melon and Voltaire; the Origins of the Luxury Controversy in France", *Studies on Voltaire and the 18<sup>th</sup> Century*, tome 155, 1976, pp. 1897-1912. 森村敏己『名誉と快樂—エルヴェシウスの功利主義—』法政大学出版局、1993年、pp. 183-210.
- 6 Mandeville, B., *The Fable of the Bees*, ed. by F. B. Kaye, Clarendon Press, 1924, 2vols., tome 1, pp. 117-123.
- 7 Melon, J.-F., *Essai politique sur le commerce*, nouvelle édition, [s. l.], 1736, pp. 90 et 83.

- 8 モンテスキューはこのように徳と名誉心を明確に区別する。この点は彼の獨創性を示すとともに、以下の議論を支える要ともなっている。
- 9 Montesquieu, *De l'esprit des loix, Œuvres complètes*, éd. par R. Caillois, Gallimard, 1949-51, 2vols. Livre VII, chapitre 7.
- 10 Ibid., Livre XX, chapitre 21.
- 11 森村敏己『アンシャン・レジームにおける貴族と商業—商人貴族論争(1756~1759)をめぐって—』(『一橋大学社会科学古典資料センター Study Series』no. 52) 2004年3月。
- 12 Coyer, G.-F., abbé, *Le développement et défense du système de la noblesse commerçante*, Duchesne, 1757, 2vols, tome 1, pp. 131-136.
- 13 Ibid., pp. 124-127.
- 14 Ibid., pp. 47-51.
- 15 Forbonnais, F. V. D. de, *Lettre à M. F. ou examen politique des prétendus inconvéniens de la faculté de commercer en gros, sans déroger à sa noblesse*, [s. l.], [1756], pp. 45-51.
- 16 Coyer, op. cit., p. 56.
- 17 Pezerols, abbé de, *Le conciliateur ou la noblesse militaire et commerçante*, Amsterdam & Paris, 1756, pp. 16-26.
- 18 Forbonnais, op. cit., p. 29.
- 19 Coyer, *La noblesse commerçante*, Duchesne, 1756, p. 154.
- 20 D'Arcq, chevalier, *La noblesse militaire*, [s. l.], 1756, pp. 194-207. Billardin de Sauvigny, *L'une et l'autre ou la noblesse commerçante et militaire*, Mahon, 1756, pp. 10-15. Garnier, J.-J., *Le commerce remis à sa place*, [s. l.], 1756, pp. 70-72. Vento des Pennes, marquis de, *La noblesse ramenée à ses vrais principes*, Amsterdam & Paris, 1759, pp. 148-151.
- 21 モンテスキューは貴族の商業に反対するだけでなく、オランダを例に商業精神だけが支配的となった国の習俗に対して批判的である。*De l'esprit des loix*, Livre XX, chapitre 2.
- 22 モンテスキューが重視する自由の維持という観点から見て、商業精神が広まった近代フランスにおいて貴族が名誉心を維持し続けることの意味については、以下の研究が説得的に論じている。川出良枝『貴族の徳、商業の精神—モンテスキューと専制批判の系譜—』東京大学出版会、1996年。
- 23 La Hausse, *La noblesse telle qu'elle doit être*, Amsterdam & Paris, 1758, pp. 167-183.
- 24 Vento des Pennes, op. cit., p. 273.
- 25 Grell, op. cit., tome 2, pp. 1141-1155.
- 26 Bibliothèque de Besançon: Ms. R. 356(2), Ms. Académie 43 (ff. 553-789). またダニエル・ロシュによれば世紀後半地方アカデミーの懸賞論文において奢侈批判以外にも、社会道徳をテーマとして掲げる傾向が強まったとされる。Roche, D., *Le siècle des Lumières en province; académie et académiciens provinciaux, 1680-1789*, Mouton, 1978, 2vols, tome 1, p. 350.